レター

犬の皮膚筋炎に類似した皮膚症状を呈した柴犬の1例

Canine Dermatomyositis-like Skin Lesions in a Shiba Inu

江角真梨子 伊従慶太 富井絢子 井手香織
岩崎利郎 西藤公司*

東京農工大学

Mariko Esumi, Keita Iyori, Ayako Tomii, Kaori Ide, Toshiroh Iwasaki, Koji Nishifuji*

Tokyo University of Agriculture and Technology

Received February 18, 2015 and accepted March 25, 2015

犬の皮膚筋炎は、若齢のシェットランド・シープドッグ、コリーおよびそれらの交雑種に好発する遺伝性皮膚疾患である。本症の病態は未だ明らかではないものの、乏細胞性血管炎に随伴する虚血性皮膚症が病変形成に関与していると考えられている¹⁾。本症に酷似した疾患が上述の好発犬種以外にも認められることがあり、成書には皮膚筋炎様疾患として記載されている¹⁾。本症はチャウ・チャウ、ボースロン・シェパード、ウェルシュ・コーギー、レークランド・テリア、ジャーマン・シェパード・ドッグ、クバーズ、ジャック・ラッセルテリアなどの犬種で報告されているものの²⁾、本邦固有の純血種に同症が発症したとの報告は著者らの知る限り存在しない。今回、犬の皮膚筋炎に類似した臨床症状および皮膚病理組織学的所見を呈した柴犬の1例を経験したため、その概要を報告する。

症例は1歳、去勢雄、体重8.7 kgの柴犬で、生後6ヵ月齢より眼瞼や耳介周囲に脱毛が認められ、その後、尾の先端や四肢端にも病変が拡大したためホームドクターを受診した。病変部には軽度のかゆみが認められたとのことであった。ホームドクターにてグルココルチコイド製剤の内服や外用、シャンプー療法ならびに食事療法などの治療を受けたものの改善が認められなかったため、東京農工大学農学部附属動物医療センターを紹介受診した。

受診時、元気及び食欲は良好で、咀嚼障害や嚥下困難なども認められないとのことであった。身体検査では耳介、顔面、四肢端の伸側および尾背部に紅斑、斑状の脱毛、色素沈着ならびに鱗屑が認められた(図1A～C)。また全ての爪において爪異常養症が認められた(図1B)。皮膚症状以外には特記すべき身体検査上の異常は認められなかった。尾部および四肢の被毛を抜毛して鏡検したところ、被毛は休止期毛が主体であり、外部寄生虫や真菌は認められなかった。病変部の皮膚掻爬物鏡検および皮膚押捺塗抹細胞診では、外部寄生虫や真菌、細菌などは認められなかった。完全血球計算および血液生化学検査では、特記すべき異常所見は認められなかった。

皮膚病変の精査を目的とし、全身麻酔下において前肢端の脱毛紅斑部よりパンチ皮膚生検を実施した。Hematoxylin & eosin (H&E) 染色では毛包付属器に重度の萎縮が認められ(図1D)、膠原線維や表皮、毛包上皮の一部では染色性が低下しており、組織虚血の可能性が示唆された。また検体の一部では境界部皮膚炎に伴う表皮-真皮間の離開が認められた(図1D 矢印)。真皮内には軽度の細胞浸潤が認められ、浸潤細胞の主体はリンパ球および好中球であった。グラム染色ならびに Periodic acid Schiff 染色のいずれにおいても、組織中に真菌用構造物は認められなかった。表皮や毛包漏斗部の基底層における空胞変性や個細胞角化、または乏細胞性血管炎に該当する血管異常は本症では認められなかった。

以上の所見より本症を犬の皮膚筋炎に類似した

* 連絡先：西藤公司(東京農工大学)
〒183-8509 東京都府中市幸町 3-5-8
TEL/FAX 042-367-5777
E-mail: kojimail@cc.tuat.ac.jp

図1 本症例における臨床症状 (A～C) および皮膚病理組織学的所見 (D)

(A) 四肢端の伸側に斑状の脱毛が認められ、一部では紅斑や色素沈着が認められる。(B) 爪異栄養症による爪甲の変形。(C) 尾背面に認められた脱毛および色素沈着。(D) 病理組織学的所見。低倍像では重度の毛包萎縮が認められる。高倍像では基底細胞の変性に伴う表皮-真皮間の離開が認められる。H&E染色。Bar = 500- μ m (低倍像), 100- μ m (高倍像)。

病態と判断し、成書の記載に基づきペントキシフィリン (25 mg/kg, q8h)²⁾、ならびにかゆみの管理を目的としてシプロヘプタジン (1 mg/kg, q12h) の内服による治療を開始した。治療開始5か月後には脱毛部の大部分が残存していたものの、一部には被毛の再生が認められ、また爪の症状にも一部改善が認められたことから、その後は継続治療とした。

本症例では、病理組織学的に犬の皮膚筋炎の特徴とされる基底層の空胞変性や個細胞角化、ならびに乏細胞性血管炎に該当する所見は認められなかったものの、四肢伸側や尾背面における毛包付属器の萎縮に伴った脱毛や爪異栄養症は、虚血性皮膚症に矛盾しないものと考えられた。また前述の症状が若齢発症したことも鑑みた結果、本症と犬の皮膚筋炎との共通点を考慮するに至った。本症例で認められた軽度のかゆみの原因は明らかで

はないものの、成書における記載と比較する限り、細菌による二次感染などが関与していた可能性が示唆された²⁾。本症は先天性疾患と考えられているものの、本症に関連する遺伝子変異については未だ詳細が明らかにされていないことから、今後は遺伝学的解析手法などを用いて本症の病因を特定する必要があると考えられた。

引用文献

- 1) Gloss, T.L., Ihrke, P.J., Walder, E.J. and Affolter, V.K., eds. 2005. pp. 49–52. *In: Skin Diseases of the Dog and Cat*. 2nd ed. Blackwell Publishing, Oxford.
- 2) Miller, W.H., Griffin, C.E. and Campbell, K.L. 2001. pp. 585–587. *In: Muller & Kirk's Small Animal Dermatology*. 7th ed. WB Saunders, Philadelphia.